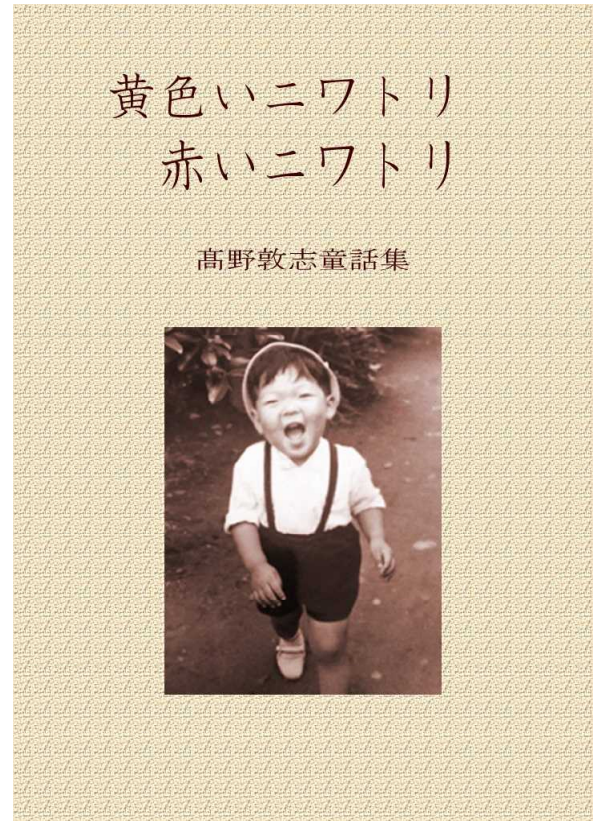


目次

黄色いニワトリ	48
子どもの作り方	26
インコのピーちゃん	12
あとがき	1

48 26 12 1



黄色いニワトリ 赤いニワトリ

まだ幼稚園に通っていたころ、おとうさんがダンボールの箱をかかえて帰ってきた。箱の穴からは黄色いくちばしがのぞき、ピヨピヨいう声までが聞こえてくる。目を輝かせて開けると、親鳥ほどに育った二羽のオンドリが飛び出した。うれしそうにはばたくと、ぼくの周りをくるくる回りはじめた。

おとうさんの友だちが縁日で買ったひよこで、狭い部屋では飼えなくなったから、うちにもらわれてきたという話だった。子ども目を喜ばせようと、ひよこの羽は黄色と赤に染められていた。生えたばかりの白い羽に混じって、元の鮮やかな色

もまだ残っていた。

新たに家族になった二羽のために、おとうさんは新しい木の匂いにする板を買って、ニワトリ小屋を作ってくれることになった。幼いぼくはノコギリが使えなかったから、おとうさんが挽いている間は、板の端をじっと押さえていた。赤ちゃんだった妹をあやしながら、おかあさんは目を細めながらぼくの方を見ていた。

トタンの屋根を取りつけ、正面には金網を張って、エサ箱も外から飼料を入れられるようにした。お百姓さんの庭で見たニワトリ小屋に負けないくらい、立派な小屋に違いなかった。ちよūdぼくの背が入る高さだったので、自分のうちを作ってもらったみたいで、ぼくは大はしゃぎだった。

「わーい、わーい」

ダンボールに閉じ込められていたニワトリも、広い小屋で動けるようになり、歩き回ってははばたきをし、夜明けでもないのにコケコッコと鳴くのだった。

おかあさんにワラ半紙を買ってきてもらい、ぼくはクレヨンでニワトリの絵を描いた。二羽が生まれてからうちにもらわれてくるまでの物語や、ニワトリ兄弟の歌などを作っては、まだ言葉の分からない妹に、得意になって聞かせたりしていた。

ニワトリ小屋は北側の日陰にあつたので、昼間は日当たりのいい庭に放してやった。そこには大きな桃の木があつて、春には近所の人たちの目を引くほど、柔らかな色のピンクの花を、青空にくっきり浮かび上がらせた。二羽のニワトリは、桃の木

の根元で、エサを探すために地面をつついている。おとなしく並んでいることもあつたが、たまたま一羽が地面からはい出してきたミミズを見つけると、黒目の部分を小さくして、引っ張り合いを始めるのだった。

「ねえ、もつと仲良くしなきゃだめだよ」

ぼくは毎日、昼過ぎに幼稚園から戻るのが待ち切れなかった。若い女の先生や他の園児たちと歩きながら、心は一足先にうちに駆け戻ってしまっていた。やつと小さな門の前にたどり着くと、大きな声を張り上げて、鍵を開けて中に入れてもらった。

思っていた通り、ニワトリは庭で雑草をついばんでいた。ブランコの上に、肩から掛けていたカバンを投げ出すと、もう追いかけてこを始めるのだった。

そのころ、南側の境には排水溝があつて、水をいっばいに張って金魚を放していた。ぼくが背後から近づくと、だいたい色の小さな魚たちは争うように、黒い影から逃れようと泳ぐので、かわいそうな数匹が疲れて動けなくなるまで、何往復でも追いかけて回したりした。

金魚たちをいじめている気はしなかった。犬と駆けっこしているくらいにしか考えなかった。おとうさんはあごに指先を当ててほほ笑んでいた。ぼくがポーズを取る前に、スナップショットに収めてしまうのだった。その様子を、黄色いニワトリはじっと眺めていたらしい。

ある日、ぼくが幼稚園から戻ってくると、黄色いニワトリが飛び出してきた。赤いニワトリは無関心らしく、庭木の根元を

ほじくり返しては、出てきたミミズと格闘している……。

「おい、ぼくをお迎えに来てくれたのかい？」

そう呼びかけて通り過ぎたとき、ぼくはふくらはぎに鋭い痛みを覚えて飛び上がった。どうやら黄色いニワトリは、ぼくをよそ者と思つて番犬の役を買つて出たか、いじめられた金魚を見て義憤にかられたらしいのだ。

「やめろよ。ぼくはおまえのご主人さまだぞ」

逃げ回るぼくを見たニワトリの方は、いじめの面白さを知つたらしく、それからは小さな門の前にぼくが立つと、待つてましたとばかりに、羽をばたつかせて寄つてきては、黄色くどがつたくちばしで、ももといふくらはぎといい、いやというほどつつき回すのだった。ぼくはいじめられる側のつらさ、とい

うものをはじめ知った。と同時に、いじめられるままになるのは、相手の思うつぼにはまるだけだ、ということにも気づかされた。そこで、逃げ回りながらも、口だけは強がりと言つてのけた。

「おまえ、そんなにぼくをつついていると、しまいには焼き鳥にして食べちやうからな」

ニワトリに人の言葉が通じるかどうか、ぼくは知らない。ただし、それを口にした時のこちらの怒りは、はつきり伝わっていた気がする。ぼくは黄色いニワトリと仲直りすることなど考えず、いきなり殺してしまおうと思ったのだから。単なる脅しに過ぎなかったのだけれど、十分過ぎる効果をニワトリに与えることになった。

明くる日からだった、ぼくが幼稚園から戻ってきてても、出てくられる鳥の姿がなくなったのは。黄色いニワトリは日に気弱となつて、つつこうとしないばかりか、こちらの姿を見かけると、逃げ回るといふありさまだった。ぼくは仕返しをしてやるつもりで、面白がつて追い回し続けた。棒など使つて小突きこそしなかったが、ぼくが足に受けた痛みの数倍は、苦しめてやろうと思つたのだ。

はたで見ていた赤いニワトリまでが、いじめの面白さに取りつかれてしまった。多少かわいそうになつて、ぼくが追い回すのをやめてからも、赤いニワトリは黄色い兄弟をくちばしでしつこく攻め立てた。オス同士のなわばり争いのようだった。狙われたのは、一番の急所であるお尻だった。羽や固い骨に

守られることなく、肉がむき出しになっている部分で、ちよつとつつかれるだけで、鮮血が吹き出してくるのだ。血のしぶきを目にする、赤いニワトリの神経はますます高ぶっていった。――黄色いくせに、おまえの体にも赤い血が流れていたんだな。そうあざ笑うかのように、赤いニワトリは治りかけた兄弟の傷を、さらにつつき回すのだった。しまいには見ていられなくなり、いじめが始まるとやめさせていたが、ぼくが目を離れたすきに、また追いかけて始めてしまうのだった。

気がついて外に駆け出すと、黄色いニワトリは血まみれのまま、庭の芝生の上に横たわっていた。まだ生きてはいたけれど、荒い息をするように胸を大きく膨らませ、小さくつぶらな目は、黒い瞳がゴマ粒みたいに止まっていた。赤いニワトリはまだ

やり足りないのか、黄色い羽をくちばしで引き抜こうとしている。

ぼくの叫びを聞いたのだろう。おとうさんが物置から棍棒を取り出して、血を浴びてますます赤くなったニワトリを、そばから追い払ってくれた。荒かった息は急に弱まって、一・二度大きく息をしようと、ぴくりとも動かなくなってしまった。

おかあさんがぼろ布で傷口をふいてくれたので、ぼくはまだ温かみのある死んだ体を抱き上げた。魂の抜けていった分、ニワトリは軽くなったような気がした。涙が込み上げてくる、あたりかまわず大声で泣き出した。黄色いニワトリが生きる勇気を失って、これほどあつけなく死んでいったのも、すべて自分のせいであつたように感じて。

冷たくなったニワトリの体は、その日の暮れる前に、いつも二羽が遊んでいた桃の木の下に埋められた。それから赤いニワトリはどうなったか、だって？ あいつのことは目にするのもいやだ、とぼくが言い張ったせいで、近所の米屋にもらわれていった。それについて詳しいことは、おとうさんもおかあさんも教えてくれなかった。おそらく、連れて行かれた日のうちに首を絞められ、晩のおかずに使われてしまったことだろう。

子どもの作り方

「もうすぐおにいちちゃんになるのよ」

ある日突然、三つだったぼくはおかあさんに言われた。そんなこと聞かされてもピンとこない。兄弟のうちの上がおにいちちゃんだ、ってことぐらいは知っていたけど。

おかあさんの体の中で何かが始まっていた。やせて小柄だったおかあさんは、日に日にお腹ばかりふくらんでいった。どうして子どもは生まれるんだろう。それが一番知りたいことだった。

ぼくはそのしくみを、自分なりにいろいろ考えてみた。結婚

したというだけで、女の人の体に変化が出て、赤ちゃんが出来てしまうのだろうか？

それじゃあ、生まれるときは、どこから出てくるんだろう。おかあさんのへその下にはおちんちんが付いていない。たてに長い切れ目があるから、もしかしたらそこからかもしかもしれないが、そんな小さな穴から赤ちゃんが生まれるとは、どうしても信じられなかった。ばかんとお腹が二つに割れて、桃太郎みたいに元気な赤ちゃんが飛び出すんだろうか？

こうした謎をおとうさんにきいてみると、おちんちんを女の人の穴に突っ込むんだと教えてくれた。

「へえ、ぼくのも入るのかな」

一人になったぼくは、社会の窓から引つ張り出すと、ブラブ

ラ下がった親指小僧を見た。きつとおとうさんは、ぼくをからかっているんだ。ぼくの小さくてやわらかいやつが、どうやったら女の人の体に入っていくんだろう。謎はますます深まるばかりだった。

それから数日たって、おかあさんは実家のそばにある大病院へ、入院前の検査を受けに行った。おかあさんが呼ばれて行くと、ぼくは廊下の長椅子にぼつんと残された。

うなだれてるのをかわいそうだと思ってくれたのか、看護婦さんが赤と紺の二色の鉛筆とわら半紙を渡してくれた。

そのころのぼくは白衣を着た女の人のことを、「かんごくさん」と呼んでいたつけ。それから、カレーライスと一緒に食べる赤い福神漬のことを、「女の子のおしんこ」と呼んでいた。

ぼくは「おちんこ」なんて言った覚えのないのに、「女にちんこなんか付いてないだろ！」っておとうさんに笑われたりした。その日、鉛筆と紙を渡されたぼくは、すぐに飽きてしまつて、おかあさんの姿を求めただけど、どこにいるのか全然分らない。ぼくは泣き声を上げて、おかあさんのことを呼んだ。自分がまた赤ちゃんであるみたいにな……。

病院の外に出ると、日傘をさした着物姿のおばあさんが待つていた。白い髪を結び上げて、天辺をべっこう飴の色したくしで留めている。しわの刻まれた額の下には、静かにもつ見る目があった。孫のぼくが近づいていっても、ニコニコ笑つたりしなかった。おばあさんはずっとむかしの「明治」という

時代に生まれた人だった。このちよつとこわそうなおばあさんこそ、ぼくのおとうさんのおかあさんだった。

「あなた、これからおにいちゃんになるんでしょ！」

まだ目をこすつていたぼくは、何でしかられているのか分からなかった。その時おかあさんは、おばあちゃんがぼくのうちに來ることになつていふと言つた。赤ちゃんを産むために、おかあさんはしばらく家からいなくなるからだつた。

ぼくは不思議そうな目で、おばあさんの顔を見上げた。ぼくは八人目の孫だったから、子猫みたいにかわいがないんだらう。

おかあさんが入院してしまつと、おばあさんがぼくのうちにやつて来て、ご飯を作つたり洗濯をしたりしてくれた。片付

けをしてしまうと、おばあさんはお膳ぜんの前に座すわって、わけの分からぬいむかしの本を読み出した。何の話なのってきいたら、ヒカルゲンジのお話しよって教えてくれた。きつとホテルか何かが出てくる話なんだなとぼくは思った。

おとうさんはちゅうがっこう中学校で教えていたから、まだ幼稚園ようちえんに上がっていなかつたぼくは、おばあさんと二人きりになった。むずかしそうな本を読んでいる間、声をかけると怒られそうな気がした。おとなしくおすわりすると、おばあさんの顔と本のページを見比べていた。そこにはひらがなにまじって、わけの分からない黒いしみが、秘密ひみつの絵みたいにならんでいた。おばあさんはなぞなぞでもしながら、たから探しをしているんだらう。ぼくはすぐに飽きてしまつて、おとうさんの部屋の中を歩き

回った。本を読んでいたおばあさんは、落ち着かなくてしようがないといったようすで、「どうしたの」と自分の方からたずねた。

「あれって何て書いてあるの？」
おばあさんはニコリと笑つた。何か良いことしたのかな。ぼくはうれしくなつて、次々つぎつぎに質問しつもんをしていった。

「それは宇治拾遺物語」
「うじちゆういものがたり？ あれは？」
「更級日記よ」
「さらしなにつき」

「ちやらちなにつき？」
ぼくは話をするのが苦手にがてだった。何かしゃべると、近所きんじよの子どもたちはゲラゲラ笑つて、ぼくにアカンベエをするのだから。

「赤ちゃん語しやべってらあ」

ぼくもおかしくなつて一緒に笑つた。病氣じゃないか、とおかあさんは心配して、お医者さんに診せに行つたほどだった。そんなぼくだったから、おばあさんもうれしかったんだらう。

休みの日が来ると、ぼくのことを聞いたおとうさんに、「あの本は何だ」とよくきかれた。

「うじちゆういものがたり、あれはちやらちなにつき」

ひらがなを覚えるよりも前に、漢字が読めるようになったことを、おとうさんも喜んでくれたらしい。でもぼくは、漢字が文字であることを知らなかったし、絵をならべたなぞなどにしか見えなかったんだから。

そのころ、ぼくのうちでは、やかんで沸かした麦茶を洗濯機

のすすぎ水で冷やしていた。ようやくさめたところで、お父さんが空けたウイスキーのビンに注ぎ込んでいく。

その日もおばあさんは、家の仕事を終わらせると、休みでいたお父さんの部屋に行き、次に読みたい本を探していた。そのすきにぼくは台所に駆け込んだ。前から謎に思っていたことを、実験で確かめようと思つたからだ。

ビンに詰められた麦茶は、ニンジンやゴボウ、大根などとともに、注ぎ口を手前にして金の栓がさされていた。冷たい空気が半ズボンに当たると、ものの周りが鶏肉の皮みたいに変わっていく。迷っているうちに、ビンはうつつすらと汗をかき出した。ぼくはその口の方に手を伸ばした。

台所で何かやっていることに、おばあさんが気づかないはず

もなかった。ただ、ぼくの方が少し早かった。予想した通りのことが起こったのだ。栓を外されたビンの口からは、ドクドクと麦茶が流れ出し、床に茶色い地図を描いていた。得意になつておとうさんに知らせようとしたとき……

「何だい、この子は！」

思わず顔を上げたぼくは、今まで目にしたことのない、怒りに震えているおばあさんを見た。その場にぼくがいることさえ認めたくない、といった冷たさがあった。

しゃがんで床をふくおばあさんを尻目に、おとうさんの部屋に逃げ込むしかなかった。寝転んで本を読んでいたおとうさんは、大体のことが分かったんだろう。ぼくが起こったことを全部話すと、おとうさんはしばらく考えていた。やがて思いついた

みたいに顔を上げて言った。

「おばあちゃんに謝っておいで」

ぼくに妹ができた、ということを知ったのは、それから十日ほど過ぎてからだ。病院に見舞に行く朝、おばあさんにシヤツのボタンをかけてもらうと、出かけるのが待ち遠しくて、畳の上で跳ね回っていた。

玄関でおばあさんは幸せそうな目で、ぼくとおとうさんを見送った。階段を駆け下りると、おとうさんが後ろにいるのを確かめながら、道路の上で丸くスキップした。お日さままでが、妹が生まれたことを祝ってくれてるみたいで。

病室の中でおかあさんはベットに寝たきりだった。妹が逆さ

まに入っていたので、おかあさんのお腹はメスで切られて、糸で縫い合わされたばかりだった。おとうさんが教えてくれた穴からは、妹は出てこなかったというわけだ。

ぼくが駆け込んでいくと、おかあさんはゆっくり体を起こし、こちらに手を差し出してくれた。

「あの中に、いただきたいカステラがあるわ」

ベットの脇の引き出しを開けたとたん、箱の中の黄色い菓子から、カステラの甘いにおいがしてきた。おとうさんに切ってもらったカステラを、床にポロポロこぼしながら、口いっぱい食べていると、おまえはまったくリスだな、とおとうさんにやにや笑っている。甘えなくなつてベットの端に座つたけれど、ばねが跳ね返るのがおもしろくて、おかあさんの傷が痛む

ことなど忘れて、トランポリみたいにジャンプした。

「あらあら」

おかあさんの体温を計りにきた看護婦さんは、それを注意しようとして、吹き出してしまったらしい。妹の顔が見たいと言うと、子どもはそこには入れないのよ、という答え。でも入口からだったから見せて上げるわ。看護婦さんに連れられて、のぞき窓のついたドアの前で、ぼくはだっこしてもらった。

「ほら、右から三番目の子よ」

妹はまだガラスの箱の中に入れられていた。そんなこと言われてもピンと来ない。赤ちゃんはまわりのおサルさんたちと、大して変わらない顔をしていた。妹が生まれたのを知り、おかあさんのお腹を引き裂いて出てきた、ということまで分かった

が、どうすれば子どもが作れるかは、いくらおとうさんに説明してもらっても、中学生になるまでずっと謎だった。

インコのピーちゃん

ぼくが高校に入って最初の冬のことだった。夜中まで降っていた雪がやんで、窓からは白く化粧した木々の枝が、朝の光を浴びて輝いていた。風はやんでいたけれど、寒さはきびしくなっていた。小さな平屋のうちの中では、ご飯を食べるキッチンだけストーブがたかかれていた。ぼくが茶碗を手にして、ご飯を食べていると、窓辺に立っていた妹が声をあげた。

「ほら、こんなところにインコが……」

声に誘われて目をやると、格子窓のガラス越し、雪の吹きつけた柵の上に、まだ幼いセキセイインコが止まっていた。小鳥

は寒さに震えているのか、暖かい室内をじっと見つめている。生まれたときから人に飼われていたのが、たまたま開いた窓から逃げ出して、雪のせいで体が冷えきっていたのだろう。

「中に入りたがっているのかな」

恐る恐る窓を開けてやると、動かずにいたインコは、差し出された手の甲にちよこんと乗った。冷たい空気が吹き込み、あわてて窓を閉めたときには、インコはうちの家族になっていた。目の下に白い羽の生えた鳥は、黄色い翼が左右そろっていなかった。生まれつきそうなのか、事故のために骨が折れて、そのまま固まってしまったのか、それとも、遠くへ飛べないように、翼の一部を切り取られていたのだろうか。

手から下りたインコは、えさでも探すみたいにテーブルの上

をついばんでいる。パンを小さくむしってやると、のどを詰まらせそうにして食べる。お腹がいっぱいになると、幼い子ども目で、わたしはいっただいどうなるの、と問いかけてくる。

意地の悪い子に見つけられていたら、小石をぶつけられて死ぬか、首をしめられてしまったら。それほど人を恐れることを知らなかった。もしお腹をすかせて動けなかったら、カラスにくちばしで食いちぎられるか、ネコのおもちゃにされて、死ぬまで小突き回されていただろう。だから、ぼくの家に迎えられたことは幸せだったのか？

インコを外に放してやる、という考えは浮かばなかった。それは飛ぶのが苦手なこの鳥を、死に追いやることになるからだ。のんびりくらす代わりに、おまえは大空を飛ぶ自由を捨ててし

まったんだよ。

ぼくはインコをピーちゃんと呼ぶことにした、家族の一員なのだから、できることなら部屋の中だけでも、飛べるようにしておきたかった。しかし、ぼくが学校に行っている間は、部屋を汚すからと許してもらえなかった。

物置の中には以前飼っていたカナリアの、青い小さな鳥籠がしまつてあった。疑うことを知らないインコは、手の甲に乗ったまま捕らえられ、籠の中に閉じ込められてしまった。何が起こったのか、まったく分からないといった様子だった。激しく羽をばたつかせ、針金の格子に飛びついたまま、きいきいと叫

びを上げている。こんな仕打ちをされるようなことを、わたしがいつしたの？ とでも言うように。

夕食を終えてから風呂に入るまでが、とらわれの身となった鳥の自由な時間だった。扉を開けようと手をかけると、待ち切れなくなった鳥は、止まり木に逆さにぶら下がったまま、身を乗り出してこちらを見る。出口を開けたとたん、激しく翼をばたかせて、じゅうたんの上で小躍りを始める。

五・六度あたりを跳ね回ると、一気にカーテンの上まで舞い上がり、誇らしげにこちらを見下ろしている。眠くなって舟をこいでいるうちに、落ちそうになったところで、ぼくの肩の上まで舞い下りてきた。

首を横に向けると、ピーちゃんは米粒よりも小さな目で見つ

め返す。黒い点みたいなレンズの中に、ぼくの顔が収まってい
るなんて、ちよつと信じられなかった。こちらが唇を動かし
て見せると、インコもくちばしをもぐもぐさせる。本のページ
に目を移すと、さびしくなったのか、ちよこちよこ腕を伝つて
下りてくる。手首のあたりに止まったまま、字を追うぼくの目
をまじまじと見つめる。

何だかかわいそうになり、ピーちゃんの方に目を向けると、
インコの表情は変わらないけれども、不思議に落ち着いた様
子で、飽きることなくこちらを眺めている。まるでおばあさん
が、幼い孫をいとおしむみたいに。

本を片付けたぼくは、今度は日記をつけ始める。ペンを握つ
て書くことほど、インコの心をいらだたせることはなかった。

書き進めている間は、体が揺さぶられて落ち着かない上に、鳥
を無視しているのは明らかだからだ。ペンを目の敵にして、
戦いを挑むピーちゃんとは、鋭い叫びとともに、黒目の部分を点
に縮ませ、ペン先にくちばしで激しい攻撃を加える。ぼくが構
わずペンを進めると、これでもかこれでもかと、気絶しかねな
い勢いでつつき続ける。たまりかねてペンを投げ出しても、
インコの怒りはすぐには解けず、小さなくちばしでペン先をつ
かみ、机の上でひきずり回してしまうほどだ。

そこでちよつとしたいたずらを思いついた。インコを手の甲
に乗せたまま、洗面所の鏡の前に近づけていった。目の前にも
う一羽の鳥が現れたと思ったのか、頭の上の毛を鶏冠みたい
に逆立たせ、おどそうとしてにらみつける。小癩なことに、向

このインコは真似をする。くちばしでつくと、歯向かつてくるではないか。抗議で上げた自分の叫びでさえ、ピーちゃんには敵の怒りに聞こえているのだらう。相手がペンの時とは違つて、一方的にこらしめるわけにもいかない。くちばしによる攻撃と、ぶつかった痛みによる悲鳴、という繰り返して、インコは気が変になりそうになる。ようやくぼくは、インコを鏡の迷宮から解放してやることにした。

寝床の支度をする前に、ピーちゃんを籠に入れなければならぬ。畳のイグサをくちばしで引つ張っているところを、そつと後ろから忍び寄るのだが、インコも同じ手にはかからなくなる。影が迫るのを感じると、キーキー叫び声を上げて逃げ回る。鳥目という言葉があるように、常夜灯だけにするともう飛べ

ずに、絶叫して掌の中で暴れるのだ。

やがて、おとなしくつかまるのが楽だと分かったのだらう、明るいまま追い立てるだけで、自分から籠の中に入ってくれるようになった。ただし、昼間はずっと閉じ込められたままなので、一月もたないうちに、カナリアが住んでいたわらの巣は、見るも無残にむしられてしまった。

それから数ヶ月のうちに、インコはすっかりなついて、ぼくが鳥籠のそばに寄るだけで、バレリーナのおじぎみみたいに、左右の翼であいさつしてくれるようになった。母が話をしている時など、耳を傾けるような素振りを見せる。何か小言を口に

していると、母の口調くちようそつくりそつくりに真似て見せる。一つ一つの発音はあいまいだけれど、短い言葉ならばつきり言えるようになった。「おはよう」と声をかけると、すぐに「おはよう」と返ってくる。

「ピーちゃん」

「……？ ピーちゃん」

インコは自分の名前を呼ばれているとも知らずに、ただ口真似しているだけなのだろう。まったくのおうむ返しというのはつまらない。ここでちよつと、悪い言葉でも覚えさせてやろうと思った。

「おい、おまえはバカか」

「アツシ！」

これはまったくの偶然ぐうぜんだったが、名前を口にされてぎよつとした。恐らくは母がぼくを呼ぶ声を耳にして、たまたま口にしてみただけだったろうが。

心が通じるようになってくると、小鳥でも人の心を理解しようとする。こちらがどうすれば喜ぶか、あの小さな頭で考え出しているらしい。

人の肩に止まったピーちゃんに、赤ん坊をあやすみたいになると、何度かはばたきをしてくれる。わざと驚いて見せると、調子に乗ったインコは、翼の勢いで飛ばされそうになりながら、爪を立ててはばたき続けるのだ。人を喜ばすのがインコにとっても、やはりうれしくてならないのだろう。

自然の中で鳥と鳥が、そこまで心を通かよわ合あっているだろう

か。たぶんひなのころから人に接することで、人間の気持ちを
知るだけの知恵がついたのではないか。

どうやらピーちゃんは、ぼくを仲間だと思っ
ているらしく、テレビを見ている時などに、肩から腕に下りてきて、こちらの
顔を見つめ、どうして二人一緒にいるのに、相手してくれない
のか、といった表情をする。それでもぼくが画面を眺めている
と、そんなに面白いなら、自分にとつてもためになるはずだと、
言葉も分からないくせに、腕に止まったまま、テレビに見入っ
ているのである。それでも、音楽番組は好きらしく、メロディ
ーに合わせて、多少音程のはずれた独唱を聞かせてくれたり
する。

ぼくとピーちゃんの信頼は築かれたわけだが、しばらくして
強力なライバルが現れた。生まれて一月足らずの子犬を、妹が
もらってきてしまったのである。胸に抱かれていたのは、茶色
い毛並みの柴犬で、人間の赤ん坊と同じく、ちっちゃな体に丸
く膨らんだ目と黒い鼻が大きく、母親から引き離されたのを知
って、おびえるように縮こまっていた。

「へえ、かわいいもんだな」

妹の腕の中をのぞき込んで、あどけない顔に見とれていると、
居間で遊んでいたインコが、一体何事かと血相を変えて、突っ
込むみたいな勢いで、玄関前の廊下まで飛び出してきたのだ。
恐らく動物の勘で何か重大なことが起きたのを、知ったに違

いなかつた。今まで独り占めしていた皆の関心が、生まれたばかりの強敵きょうてきに奪さらわれるのだと。

確かにぼく以外には、ピーちゃんを構かまってやらなくなり、旅行に出かけている間なども、籠の中に入れられたままだった。そのためだろう、インコは子犬に対して、ますます敵意てきいをあらわにするようになった。

初めのうちダンボールの箱に寝かされていた犬は、父がリンゴ箱で作った小屋に移された。牛乳沸かしで柔らかく煮たおかゆを、冷ますために縁側えんがわのじゅうたんの上に置くと、カーテンからインコが飛んできて、鍋なべの柄えの部分ぶぶんをくちばしではさむと、体のどこにそんな力があるのか、と思えるほどの勢いで、ぐるぐる鍋を回してしまふ。えさをやって空からになつてゐる時など、

腹癒はらいせにつつき回したあげく、中に入ったスプーンもろともひっくり返してしまふのだつた。

ある春の午後、ぼくが子犬の様子を見ようと、インコを放しているのも忘れて、うっかり窓を大きく開けた時だつた。わずかなすきに、ピーちゃんはパツと軒先のきさきに飛んでいくと、小屋の中で居眠りいねむしている子犬など見向きもせず、つぼみが膨らみかけた桃の枝に移っていった。

あわてるぼくをよそに、そちらの枝、あちらの枝と移りながら、長い間味わえなかつた外の空気を、思うままに楽しんでいようだった。もうあなたがたには愛想あいそを尽つかしましたよ、とでも言うように。

インコは次第しだいに庭の端の方に移っていった。このまま通りの

電線にまで行ってしまったら、我が家に戻ってくることはないだろう。ぼくはここ数ヶ月のピーちゃんに対する、冷ややかな態度について思った。心のつながりは切れかけている！ 薄れかけたピーちゃんへの思いがよみがえり、遠ざかろうとする黄色い翼に向かつて祈った。ぼくのことを見捨てないでくれ、もう一度だけチャンスをくれ、と。インコは青空高く舞い上がったかと思うと、大きく弧を描いてはばたきながら速度を落とし、ぼくの肩の上にちよこんと乗った。

ピーちゃんとぼくはまた仲良しになった。けれども、秋が過ぎて冬が訪れるころには、また関心は薄れてしまったのだ。

自分の心をとらえていたのは、大きく成長した柴犬と一緒に、野山を駆け回ることだったからだ。

夕食を済ました後、申し訳程度に部屋で放すだけで、糞をするから汚いという母の苦情もあつて、早々に籠の中に戻してしまうようになった。インコをはじめ熱帯原産の鳥は、とりわけ真冬の寒さには弱い。夜遅くなる前に、インコの籠には黒い布をかけていた。冬場は食べる量もふえる。朝にやったえさの箱が、晩には殻だけになっている。粟を入れてやると、気が狂ったみたいに、目の色を変えてのどを詰まらせるほどの勢いで、数分間は食べ続けていたりする。

ぼくの就職活動が始まっていた。インコを構ってやる余裕

はなくなり、えさをやるのも母に任せつきり、何日も相手をし
てやらないこともあった。ふとんを敷いていると、黒い布の下
でガサガサ暴^{あほ}れていたが、それも大して気には留めなかった。
朝になって雨戸^{あまど}を開けると、久し振りにインコの顔が見たく
なって、黒い布をそつと外してみた。止まり木には鳥の姿はな
い。籠の底にインコは横たわり、えさ箱の中に頭を突っ込んで
いた。粟の殻さえも食べ尽くして、じつと動かぬままだった。

「ピーちゃん死んだ！」

思わず叫んで台所に走り込んだ。ぼくは自分の言葉が裏切^{うらぎ}
られ、死にかけてインコが命を取り留めるようにと、心が張り裂
けそうになっていた。

恐る恐る籠の中に手を入れると、掌^{てのひら}にインコを載せて取り

出した。羽はすでに乾き切っており、体は驚くほど軽くなって
いる。生きていた時の信じられないほどの力は、何かと一緒に
抜けていってしまったようだ。まだ体には温^{ぬく}もりがあったので、
生き返らせようとして、電気ストーブで暖^{あた}めたりしたが、足
はぶらぶらと左右に揺^ゆれるばかり。開けたままの瞳^{ひとみ}もやがて
乾いて、首もだらりと垂^たれ下がってしまった。

ぼくはようやく、自分がピーちゃんにした仕打ちを思った。
雪のやんだ朝、たまたまぼくの家を訪^{たず}ねて、心を開く機会を得
て、自分を人間のように感じるようになったのに。心変わりを
したぼくは、あいつを籠に閉じ込めたままにしていた……。

心の結びつきを知った鳥にとつては、人間に劣^{おと}らない苦しみ
だったろう。素直^{すなお}な気持ちしか抱^{いだ}かず、文句を言うこともでき

ない分だけ……。いつそのこと、情なさけなどかけてもらえず、一生籠かごに閉じ込められたままの鳥の方が、期き待たいに身こを焦こがさない分だけ、苦しみは少ないのではないか。

ピーちゃんが死んでからは、ぼくはもう鳥を飼うことをやめた。子どもだった柴犬も、十年以上たつて死んだ。今ではぼくの庭に見られるのは、スズメとヒヨドリ、ヤマバト、ノラ猫ぐらいなものだ。こいつはぼくのものだなどと、勝手な思いいを抱いだくこともない。

人間の心など知らない方が、自然のままに生きた方が、動物にとつては幸せだからだ。籠かごの中に閉じ込めたり、鎖くさりでつないでおくなんてもうこりこりだ。

それからというもの、庭を花でいっぱいにすることにした。

今はツツジが満まん開かいだし、少し前まではジンチョウゲが、つつましやかな香りで、穴あの空あいた心を慰なぐさめてくれていた。鉢はち植ちえのスマレやマツバボタンも、水を欠かさずやることで、つぼみを大きく膨ふくらませていく。夏の夜、ただ一夜だけ、みだらな白い花を咲かせるクジャクサボテンなどは、我わが家やが誇ほこれる幻まぼろしの花だろう。

みずみずしい花々の姿を見ると、自分が生きているという感かん覚かくがよみがえってくる。けれども、ぼくの夢の中に出てくるのは、死んでしまった動物たちばかりで、インコはいまだに肩に止まって、老人の繰くり言ことみみたいに何かしゃべっているし、おとし死んだ柴犬だって、元気に走り寄ってきて、ぼくの頬ほおをぺろりとなめてくれる。それはぼくがまだ幸福だったころの思い

出と、一つになっているからだろう。

あとがき

ここで取り上げた三篇は、僕にとっては幼時から、成人したころまでの思い出が元になっている。童話集と銘打ったけれども、子どもにも読ませるのに適しているかどうかは、はなはだ疑問である。ただし、小学生が読んでも分かるように、難しい表現は極力避けて、読みにくそうな漢字にはふりがなを多数つけた。

二〇一三年一月十八日

高野敦志